

学校図書館実践者へのインタビュー 内容紹介 ～効果的な授業支援のあり方とは～

平成 22、23 年度の 2 か年で実施した「学校図書館との連携による学習支援プロジェクト」の最後に、効果的な授業支援のあり方をテーマに、教員、司書教諭、学校司書として学校現場で活躍される方々を対象としたインタビューを行いました。内容の一部を紹介します。

■ 日時・場所 平成 24 年 3 月 19 日（月）14:00～17:00 国際子ども図書館研修室

■ 参加者（○オブザーバー ◎主査 △事務局）

実重和美氏（松江市立東出雲中学校 学校司書）

村上恭子氏（東京学芸大学附属世田谷中学校 学校司書）

遊佐幸枝氏（東京純心女子中学校 司書教諭）

○赤木裕朗氏（相模原市立藤野小学校 教諭）

○中山美由紀氏（東京学芸大学附属小金井小学校 学校司書）

◎鎌田和宏氏（帝京大学文学部教育学科 准教授）

△国際子ども図書館児童サービス課



■ はじめに（鎌田和宏先生）

学校で授業に図書館を使う教員は少数です。しかし、言葉を使う力、考える力を育てる基盤となるのが図書館です。学校図書館を使って授業ができるように、以前『先生と司書が選んだ調べるための本』を作りました。その後、国際子ども図書館から、中学生の調べ学習のためのブックリスト作成のノウハウを探るプロジェクトの相談がありました。そこで、この本の中学生版作成のノウハウのモデルとして始めました。



先生と司書が選んだ調べるための本：小学校教科で活用できる学校図書館コレクション
少年新聞出版社、2008

■ 授業で学校図書館を活用するにあたって

学校図書館を使った授業をするにあたり、心がけていることをうかがいました。

大切なのは双方向の「打ち合わせ」

実重) 事前に授業をする教員に確認しておくことは「授業のねらい」です。授業を通じて子どもにどうなってほしいかを図書館員と教員で共通理解しておく必要があります。
中山) どうやって図書館を使ったらよいかわからない教員も多いので、こちらからインタビューして、教員から授業の目的や方法を聞きだす必要があります。



学校図書館実践者へのインタビュー 内容紹介 ～効果的な授業支援のあり方とは～

遊佐) 図書館を使ってどのような授業ができるか、こちらから提案することもあります。

村上) 具体的に図書館員と教員とが打ち合わせることで、教員の授業イメージや目的が明確になることもあります。

実重) 教員への「インタビュー」でなく「打ち合わせ」、お互いに話すのが大事です。

国際子ども図書館) 公共図書館は「打ち合わせ」に入りにくいのでは。

中山) 公共図書館側からも提案してかまわないのではないのでしょうか。

赤木) 教員として司書に希望することは、本がわからないので教えてほしいです。また、授業の相談に乗ってもらいたいです。学校では図書館を使う授業は誰も経験していなかったもので、公共図書館に足を運んで教えてもらいました。

学習レベルを知るには教科書

国際子ども図書館) 公共図書館が中学校の授業支援を提案するとしたら、各教科の学習内容についてどこまで知る必要があるのでしょうか。

実重) ベースは教科書をきちんと見ること。支援する授業については、必ず教員に教科書のコピーをもらっています。

遊佐) 中学生向けの教科書の事典や教科書準拠の資料集などを読めば、中学生レベルでどの程度のことが書かれているのかわかります。

実重) 実際の授業で資料を提供する際には、中学生レベルの資料を中心に、教員のねらいも意識して、そのレベルの前後の資料も含めて、資料の幅を広げています。

教員へのフィードバックも大切



村上) 図書館を使った授業の一番のインパクトは資料が十分にあることだと思います。生徒がやらされているのではなく、自ら本を選び、調べてみたらおもしろかった、という体験をしてほしいです。

実重) 授業の後で、教員に「調べるのが楽しい」という生徒の感想をフィードバックします。

中山) 生徒の調べた作品を学校図書館に掲示するとみんなが見ます。子どもが見て、図書館を使った授業は楽しいと思ってくれると、別の教員も「図書館を使ってみようかな」と思ってくれます。

教科学習に情報リテラシー教育をどう組み込むか

村上) 図書館で調べる力をつけるための時間はなかなか取れません。情報リテラシー能力を養う指導を国語の授業の中にうまく取り入れれば、無理なく勧められると思います。

国際子ども図書館) 教科学習のなかで単発の授業に情報リテラシー教育の要素を組み込むより、体系的な計画を立てることが必要なように感じました。

学校図書館実践者へのインタビュー 内容紹介 ～効果的な授業支援のあり方とは～

赤木) 私の小学校では6年間の全体計画を作りました。単発で何年かやってみたのですが、それでは力がつかないことがわかったからです。国語を中心に教える内容を精選して、卒業するときには図鑑と百科事典は使える能力をつける計画を立てました。

鎌田) 情報リテラシーの習得は、組織で長いスパンで考えないといけないのでしょう。

■ 図書館のプロとして大切なこと

図書館員が調べ学習を支援するには何が大切だと思うかがいました。

村上) 本を知ろうと努力し続けることです。教育現場にいる強みは、子どもに寄り添って話ができることや、教員と直接話ができることです。教員が何を求め、生徒が何で困っているかつなげたいと思います。

遊佐) 本を知る努力もしていますが、それだけでなく、本を教育で使う方法を知りたいと思っています。

本を使ってこういう教え方ができないか、それを教員に提案できないか、授業の方法論のようなものを自分の中に持ちたいです。

実重) 公共図書館を含む図書館員の強みは、本を知っていることです。学校図書館ではさらに、知りえた本を授業で使えるようにどのように教員に手渡せるかを知ることが大事だと思います。



■ ミーティングを終えて



2年間のプロジェクトを通じて、授業で使う本は教員の授業のねらいにより異なるため、授業にあわせて学習用ブックリストをカスタマイズしていく必要があることがわかりました。さらに、今回のミーティングでは、一方的に教員にインタビューするのではなく、どのようなことができるのかを図書館からも提案できる、という意見が大変参考になりました。

本を知ることが図書館員の強みである点は、学校図書館も公共図書館も変わらない専門性であると思います。本を知る図書館員が、学校や学校図書館と連携して、子どもに図書館を活用することの意義を伝えてほしいと思います。